

ぎだゆう座

六月
公演

二十五周年記念

二〇二五年 六月一日(日)・二日(月)

【開場】十八時 【開演】十八時三〇分

【一日(日)】

花競四季寿 万歳

浄瑠璃	竹本佳之助	三味線	鶴澤三寿々
〃	竹本 綾一	〃	鶴澤 賀寿
〃	〃	〃	鶴澤 三響

新版歌祭文 野崎村の段

(前) 浄瑠璃	竹本京之助	三味線	鶴澤津賀花
(奥) 浄瑠璃	竹本 越京	高音	鶴澤 朔弥
〃	〃	三味線	鶴澤津賀花
〃	〃	ツレ	鶴澤 弥々

【三日(月)】

花競四季寿 万歳

浄瑠璃	竹本佳之助	三味線	鶴澤三寿々
〃	竹本 綾一	〃	鶴澤 賀寿
〃	〃	〃	鶴澤 三響

絵本太功記 尼ヶ崎の段

(前) 浄瑠璃	竹本 越里	三味線	鶴澤 駒治
(奥) 浄瑠璃	竹本 越孝	三味線	鶴澤津賀榮



25周年

ぎだゆう座

偶数月の1日・2日は

ぎだゆう座

【ところ】お江戸上野広小路亭 TEL | 03-3833-1789 (11:00~19:00、不定休)

- ・JR山手線 御徒町駅北口より徒歩3分
- ・東京メトロ銀座線 上野広小路駅A4出口より徒歩1分
- ・都営地下鉄大江戸線 上野御徒町駅A4出口より徒歩1分

【入場料】前売 | 2,000円 18歳未満 | 1,000円 当日 | 2,500円

【お申し込み】(E-mail) jjyogi.gidayuza@gmail.com

【お問い合わせ】一般社団法人義太夫協会

TEL | 03-6264-3047 (平日 10:00~17:00)

HP | <https://www.gidayu.or.jp>

【主催】ぎだゆう座

【共催】永谷商事株式会社



※裏面もご覧下さい

【両日】花競四季寿 万歳

花競四季寿は、題名に表される通り、春夏秋冬の構成となっており春の「万歳」は新年に家々を訪れて祝言を述べ、舞を演じる門付け芸及びその芸人のことをいいます。烏帽子に大紋の直垂または素襖姿で扇を持った太夫と、大黒頭巾にたっつけ姿で鼓を持つ才蔵の二人一組で演じました。太夫と才蔵が新年を祝し、鼓を打ちながらにぎやかに町に行く様を描いた、おめでたい演目です。

【1日】新版歌祭文 野崎村の段

油屋の丁稚久松は、集金した金を贖金とすり替えられ、野崎村の養父久作の元へ返されています。久作は重病で盲目となった後妻、そしてその連れ子のお光と暮らしていますが、ゆくゆくは久松とお光を夫婦にしようと思っていました。久松が戻ったので、祝言をあげさせようとお光に支度をさせているところへ、かねてから久松と恋仲の油屋の娘お染が、跡を追って訪ねてきます。心中をも覚悟する二人に久作は意見して、別れることを納得させますが、お光は二人の気持ちは揺るがないと悟り、自分が尼僧になることで、二人を一緒にさせようとしします。その様子を外で聞いていたお染の母は、前に久作が手代の小助に渡した金を尼への布施として差し出します。世間を憚り、久松は駕籠、油屋母娘は舟で大坂へと戻っていくのでした。

【2日】絵本太功記 尼ヶ崎の段

〈これまで〉 武智光秀の母皐月の尼ヶ崎の閑居に、光秀の妻操は息子十次郎の許嫁初菊をともない訪ねます。そこへ一人の僧侶が宿を求めてきます。

十次郎は暇乞いをして初菊と祝言をあげ、別れを惜しむまもなく出陣します。風呂が沸き、僧侶が最初に入ることになりました。僧侶を追いかけ藪畳からあらわれた光秀、僧侶を真柴久吉と睨み、竹で槍を作り障子越しに久吉を突きますが、意外にもそこにいたのは母皐月、光秀は呆然となります。光秀の企みを察した皐月が久吉のかわりに息子の手にかかったのです。主殺しの罪が親にむくいたとあれば光秀も罪深さを思い知るだろうとの親心からでした。

そこへ負傷した十次郎が息も絶え絶えに戻り、操、皐月の見守る中、初菊と名残を惜しみながら息絶え、光秀も涙をこらえきれません。凛々しく現れた鎧姿の久吉に光秀は詰め寄りますが、戦場は天王山でと再会を約束するのでした。

《お客様へのお願い》

- ＊ 会場備え付けのスリッパは使用できません。
必要な方はご持参下さい。

- ＊ マスクの着用を推奨しております。
- ＊ 37.5℃以上の発熱のある方、それ以外でも咳・痰の症状があるなど体調の悪い方は来場をお控え下さい。
- ＊ 演奏中の許可のない録音・撮影は、お断り申し上げます。